

令和4年
7月29日

病害虫発生予報 8月号

茨城県病害虫防除所

農薬散布の際は事前に近隣農家や周辺住民に連絡しましょう

～令和4年度茨城県農薬危害防止運動期間（6/15～9/14）～

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稻：いもち病（穂いもち）	1
水稻：斑点米カメムシ類（イネカメムシ、クモヘリカメムシ）	1
○ミナミアオカメムシの発生について	2
大豆：チョウ目幼虫	3
サツマイモ：ナカジロシタバ	3
ナシ：ナシヒメシンクイ（第四世代幼虫）	4
【防除所レポート】ナシヒメシンクイの防除適期の予測	4
果樹共通：チャバネアオカメムシ	5
共通害虫：シロイチモジヨトウ	5
【その他の病害虫】	
水稻、大豆、ナシ、ブドウ、秋冬ネギ、夏秋ナス、共通害虫	5
○クビアカツヤカミキリにご注意ください	6

II. 今月の気象予報 7

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>

フェロモントラップデータ随時更新中



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（穂いもち）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、葉いもちの発病度¹⁾（本年値5.1、平年値2.8）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値77%、平年値42%）は平年よりやや高い～高い。

1) 発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① いもち病菌がイネの穂に侵入しやすいのは、出穂直後から出穂後14日位までである。この期間に降雨が続く場合は、発生に注意する。
- ② 穂いもちを対象とした液剤による防除適期は、穂ばらみ末期～穂揃期である。葉いもちが多発し、上位葉に病斑が進展している水田では、防除を徹底する。
- ③ 出穂期に降雨が続いて穂いもちの多発が予想される場合には、②の防除に追加して、収穫前日数等に注意し、傾穂期（穂揃期10日後頃）に液剤による防除を行う。
- ④ 殺菌剤を複数回使用する場合、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤を選択する。
(令和4年7月12日発表 病害虫速報No.6参照)

2. 斑点米カメムシ類（イネカメムシ、クモヘリカメムシ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、水田内におけるイネカメムシの10回振りすくい取り虫数（本年値1.31頭、平年値0.05頭）は平年より多く、発生地点率（本年値5%、平年値2%）は平年よりやや高い。
- ② 7月下旬現在、水田内におけるクモヘリカメムシの10回振りすくい取り虫数（本年値0.39頭、平年値0.44頭）は平年並、発生地点率（本年値14%、平年値11%）は平年並～やや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 不稔被害の軽減を目的とした防除は、出穂期～穂揃期に行う。出穂期前後の圃場で成虫や幼虫を確認した場合は防除を実施する。
- ② 斑点米被害の軽減を目的とした防除は、乳熟期（出穂後10～15日頃）に行う。乳熟期以降の幼虫密度が高いと斑点米の発生量が多くなる。
- ③ ふ化直後の幼虫は非常に小さく、気がつかない場合があるため、水田内をよく観察する。
- ④ 発生量が多い地域は、出穂期～穂揃期と乳熟期の2回散布を検討する。
- ⑤ 晩生品種等、周辺より出穂の遅い水田では、成虫の飛来が集中し、不稔等の被害を及ぼす恐れがあるので注意する。

ミナミアオカメムシの発生について

令和2年8月、県南地域の水稲圃場において本県では未発生のみナミアオカメムシ（写真1）の発生が確認された（令和2年9月28日付け 令和2年度病害虫発生予察特殊報 第1号参照）。その後、県南地域の大豆圃場でも発生を確認した。令和3年8月、県南地域に設置した予察灯において、本虫が誘殺された。本虫は、広食性であり、水稲、大豆の他、野菜類や果樹類等多くの植物を吸汁することで知られている。

本年5月、県南地域の小麦圃場で発生を確認し、7月に予察灯で誘殺を確認した。今後、水稲、大豆、果樹等、他作物での発生が懸念されるため、注意が必要である。

〔形態の特徴〕

成虫の体長は12～16mmで、外見はアオクサカメムシによく似ており、小楯板上端に3つの白い斑点があることは共通している（写真2）が、触角の第3～5節の前半分が褐色（アオクサカメムシは黒色）であることや、腹部背面が一様に緑色（アオクサカメムシは一部が黒色）であること（写真3、4）で識別できる。成虫の体色には遺伝的変異があり、多くの色彩型がある。

〔生態の特徴〕

1～5齢幼虫を経過して成虫となり、国内では年3～4世代を経過する。成虫で越冬するが、最寒月の平均気温が5℃以下の地域においては個体群が維持できないとされている。

〔被害の特徴〕

成幼虫ともに口針で植物の汁液を吸汁する。水稲では穂を吸汁し斑点米を生じさせる。本虫は斑点米カメムシ類の中では比較的大型であり、低密度でも被害が大きくなるとされている。

〔防除対策〕

本種を確認した圃場では、必要に応じて各作物でカメムシ類に登録のある農薬で防除する。なお、農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用基準、注意事項等を確認の上使用する。



写真1 ミナミアオカメムシ5齢幼虫



写真2 ミナミアオカメムシ成虫
（円内の小楯板上端に3つの白い斑点）

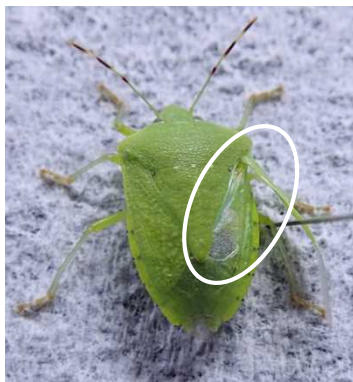


写真3 ミナミアオカメムシ成虫の腹部背面
（円内が一様に緑色）



写真4 アオクサカメムシ成虫の腹部背面
（円内の一部が黒色）

大豆

1. チョウ目幼虫

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、25株当たりの寄生幼虫数（本年値1.4頭、平年値0.6頭）は平年より多く、発生地点率（本年値100%、平年値46%）は平年より高い。主な発生種はオオタバコガ、ツメクサガ、ハスモンヨトウ等である。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年よりも高く、降水量は平年より少ないと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると防除効果が劣るので、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。
- ② ハスモンヨトウでは、白変葉（若齢幼虫の集団加害によって、白く透けた葉）の発生を防除の目安とする。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元までよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を選択する。

サツマイモ

1. ナカジロシタバ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、100葉あたりの寄生虫数（本年値0.2頭、平年値0.1頭）は平年よりやや多く、発生地点率（本年値20%、平年値6%）は平年よりやや高い。
- ② 7月下旬現在、被害つる先率（本年値12.0%、平年値6.9%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値80%、平年値50%）は平年並～やや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 例年より早い時期から被害が多く認められているため、圃場をよく確認し、防除適期を逃さないよう注意する。
- ② 老齢幼虫になると防除効果が劣るので、若齢～中齢幼虫の時期（つる先、上位葉に丸く穴の開いた葉が散見される時期）の防除に努める。
- ③ 薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう丁寧に散布する。

（令和4年7月12日発表 病害虫速報No.5参照）

ナシ

1. ナシヒメシンクイ(第四世代幼虫)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、調査圃場のナシ果実において、県南地域の一部圃場で被害果を認めている。
- ② 4月から7月中旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、かすみがうら市で平年より多く、笠間市、小美玉市で平年よりやや多く、土浦市、筑西市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果を見つけた場合は、速やかに処分し、成虫の発生を防ぐ。
- ② 早生品種(「幸水」等)で被害が認められた場合は、中生～晩生品種(「豊水」や「新高」等)で被害が多くなる傾向があるので注意する。
- ③ 薬剤は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、葉液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。
- ④ 薬剤防除の際は、収穫前日数等に十分注意する。
- ⑤ 薬剤散布の時期については、下記の防除所レポートを参考にする。

防除所レポート [ナシヒメシンクイの防除適期の予測]

- ① ナシヒメシンクイ第四世代幼虫を対象とした防除適期は、**第三世代成虫の誘殺数がピークに達した日(誘殺最盛期)の1～2日後**である。
- ② 各地点の第三世代成虫の誘殺最盛期は、第二代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から予測した。
- ③ 今後、病虫害防除所ホームページで誘殺状況を随時更新するので参考にする。
※薬剤散布の際には、収穫前日数等に十分注意する。

表 調査圃場におけるナシヒメシンクイ第四世代幼虫の予測防除適期

地点	第四世代幼虫の予測防除適期 ¹⁾		
笠間市	8月12日	～	8月17日
小美玉市	8月12日	～	8月17日
かすみがうら市	8月8日	～	8月12日
土浦市	8月12日	～	8月16日
筑西市(旧下館市)	8月12日	～	8月17日
筑西市(旧関城町)	8月16日	～	8月21日

1) 第二世代成虫の誘殺最盛期を基に予測した(7月26日現在)。

果樹共通

1. チャバネアオカメムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、ナシ園における果樹カメムシ類の被害果率（本年値 0.42%、平年値 0.09%）、発生地点率（本年値 25%、平年値 7%）はともに平年より高い。
- ② 4月から7月第4半旬までの予察灯への総誘殺数は、かすみがうら市で平年並～やや多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 果樹園内でカメムシ類を確認した場合は、活動の鈍い早朝に薬剤散布を行う。
- ② 薬剤防除の際には、収穫前日数等に十分注意する。
- ③ 今後、果実が肥大するカキやリンゴの圃場では、カメムシ類が飛来する恐れがあるので注意する。

共通害虫

1. シロイチモジヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月第4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、つくば市で平年より多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 圃場をよく観察し、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努める。中齢以降になると、薬剤の効果が低くなるだけでなく、作物内に食入し薬剤が届きにくくなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② 結球葉菜類では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培ではハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 令和2年度に主要薬剤の殺虫効果について試験を行ったので参考にする。

（令和3年3月24日発表 病害虫発生予報4月号 p7-8 防除所レポート参照）

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
水稲	紋枯病	発生量：平年並～やや少ない	7月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。
	ニカメイガ	発生量：やや多い	7月下旬現在、平年よりやや多い発生である。

【その他の病害虫】（続き）

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
水稲 （続き）	イネツトムシ	発生量：平年並 ～やや多い	7月下旬現在、平年並～やや多い発生である。葉色が濃い水田では発生に注意し、発生が多い場合には、幼虫が小さいうち（葉先が巻かれ始める時期）に防除を実施する。
大豆	べと病	発生量：やや多い	7月下旬現在、平年よりやや多い発生である。比較的冷涼で、降雨が多いと発生が多くなるので注意する。
	紫斑病	発生量：－	防除適期は開花期の20日後頃である。開花期から成熟期までに連続した降雨があると、発生が多くなるので注意する。
	カメムシ類	発生量：やや多い	7月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
ナシ	黒星病	発生量：平年並	7月下旬現在、平年並の発生である。
	ハダニ類	発生量：やや多い	7月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
ブドウ	灰色かび病	発生量：多い	7月下旬現在、平年より多い発生である。
	晩腐病	発生量：平年並	7月下旬現在、平年並の発生である。袋掛け後の防除を徹底する。
	褐斑病		
	べと病		
ネギ 秋冬	ネギアザミウマ	発生量：－	7月下旬現在、夏ネギにおいて平年並～やや多い発生である。
ナス 夏秋	アザミウマ類	発生量：平年並	7月下旬現在、平年並の発生である。
共通害虫	オオタバコガ	発生量：平年並～ やや多い	7月下旬現在、フェロモントラップへの総誘殺数は、土浦市で平年よりやや多く、龍ヶ崎市および筑西市で平年並である。
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少ない ～少ない	7月下旬現在、フェロモントラップへの総誘殺数は、鉾田市で平年並、土浦市、筑西市および龍ヶ崎市で平年より少ない。

クビアカツヤカミキリにご注意ください

クビアカツヤカミキリは、幼虫がサクラ、ウメ、モモなどの樹木の内部を食害して衰弱させ、枯死させる昆虫です。

茨城県環境政策課生物多様性センターによると、茨城県内では令和元年に県西地域の公園で初めて発生が確認され、令和4年6月には県西地域の他市町村でも発見例が報告されています。令和4年7月現在、県内の生産園地での発生は認められていませんが、果樹や花木などの生産園地での発生について、一層の警戒が必要です。

特に6～8月にかけては、成虫が出現し、産卵や生育が活発となります。生産園地で疑わしいカミキリムシやフラス（幼虫の糞と木くずが混ざったもの）を発見した場合は、直ちに病害虫防除所あてにご連絡ください。

なお、クビアカツヤカミキリは特定外来生物に指定され、生きた虫の飼育、運搬、放虫等が法律で禁止されています。成虫を発見した場合は、その場で足で踏みつぶすなどして捕殺してください。



（写真）クビアカツヤカミキリ成虫

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 7月30日から8月29日)

気象庁(7月28日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	10	30	60
	降水量	関東甲信全域	40	30	30
	日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 7月30日(土曜日)から8月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率60%

<2週目の予報> 8月6日(土曜日)から8月12日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<3週目から4週目の予報>8月13日(土曜日)から8月26日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。